

今年度も力作が届けられ、惜しくも選外になってしまった実践研究もすばらしいものばかりでした。投稿してくださった先生方に感謝いたします。審査は専門性の異なる6人の委員と立ち合い人で、審査基準の「独創性」「進取性」「適用性」「有効性」「構成力」「表現力」に基づき、多様な視点から検討いたしました。受賞した実践研究のテーマは普遍的課題と現代的課題の双方に通じるものです。保育文化賞と優良賞を受賞された実践研究は、審査基準のどれをとっても優れていました。また、今年度の奨励賞については、重要な課題に向き合う2つの実践研究が選ばれました。

保育文化賞

「発表したい」から始まったクラスの物語～Show & tell が広げた子供たちの世界～

認可保育園子ども芸術大学 志村沙希先生

Show & tell は、子どもが自分の好きなおもちゃなどを見せながら説明し、その後子ども達が質問して楽しさを深めていく保育方法です。子ども達は言語能力、プレゼン力、主体的姿勢だけでなく、聴く力や質疑を通じた対話力や考える力などを遊び感覚で培っていきます。YouTube に動画などがありますので、ご興味がある先生方はご覧になってください。どの園でも取り組める適用性、有効性が高い実践です。志村先生はこの保育方法をアメリカで経験してこられました。その意味では今回、単発ではなく、先生にとって継続性のある取り組みです。

志村先生が担当された4歳児クラスでは、「自分の話をしたい」という思いを持ち、豊かな発想力と探求心にあふれるクラスでした。先生は show & tell という保育方法を活用し、子ども達の「話したい」欲求を満たすだけでなく、主体性や聴く姿勢、対話する姿勢を培っていかれました。大学の中にある保育園であることを生かし、大学の作品とその作者に会うという子ども達にとっておそらく刺激的な経験もあります。その経験はやがて自分達のモンスター作り、そして更に自分のモンスターづくり、そしてなんとモンスター図鑑として本になるというすばらしい成果へと発展していきました。

言語や知的好奇心、想像力などが飛躍的に伸び、自己主張も強くなる4歳児の発達に適したとても良いダイナミックな取り組みでした。更に実践研究として大事なものは、実践記録で終わらず、志村先生がこのプロセスを「プロジェクト保育」として捉えなおし、子ども達にどのような力が培われたのか、どのような育ちがあったのか、保育者のどういう関わりが子ども達の新たな発想につながったのか、どのような価値があったのかななどを分析・考察されたことです。他の園にも大いに参考にさせていただける実践研究です。

優良賞

『保育をつなぐマネジメントの在り方：保育アプリ活用の改善プロセスを通して』

六満こども園 内海 貴子先生

本実践研究は園のマネジメントに焦点を当て、園全体で組織的に取り組まれた実践研究です。「園での子どもの様子をもっと知りたい」という保護者からの声を受けて、「電子連絡帳」を導入されました。保護者の満足度は上がりました。また、テクノロジーを活用して保育の可視化を進められました。日本は保育におけるデジタルトランスフォーメーション（DX）が他の教育段階そして欧米先進国と比べかなり遅かったこともあり、今回の実践研究は大いに歓迎されるものです。

研究方法も優れていました。保育の可視化ともつながりますが、アンケートやインタビューによってデータを集め、分析し、エビデンス（証拠）に基づいた実践を展開しておられます。しかも、保護者対象のアンケート調査は適切なプロセスを踏んでおられ、大いに評価できます。また、課題を見つけ、それに対するアクションを考え、実践して評価し、課題を見つけまた改善するという、いわゆるPDCA(plan, do, check, action)サイクルを踏んでおられることも評価された点です。これからの時代、データの活用力が保育者にも期待されます。他にもマネジメントとしては、リスペクト型マネジメント、ボトムアップ型リーダーシップを採用したことが強調され、勉強しておられることが伝わりました。

しかし、これからまだまだ取り組まなければならない課題があります。「プライバシー」「肖像権」「データ管理」の課題です。DXに取り組む社会や組織のすべてが向き合っている倫理的課題です。特に写真など配信したものが拡散したり、悪気がなくても第三者に無断で利用されたりすることがないように、保護者や関係者の間でしっかりとした倫理観を持ってルールを定め、それを守っていただけるよう保護者との取り決めやコミュニケーションが重要になってきます。

奨励賞

「蚕飼育を通して子どもと一緒に悩みながら考えたこと」

たかつかさ保育園 矢倉 啓先生

本論は、「命について考える」ことをテーマとするチャレンジングな実践研究です。たかつかさ保育園では蚕を飼育し、繭から糸をとるまで、京都の和装文化に深く関わる経験を子ども達にさせておられ、本園の独自性として是非残していただきたい実践です。しかし、私たちが蚕の命をいただいて着物を着ている現実をどう子ども達に伝え、理解させるか、先生も子ども達と悩みながらこの難しい課題に取り組まれました。

子ども達は蚕の命とかかわる3つの経験をします。①蚕が幼虫から蛾になり、卵を産ん

で死んでいく「命の循環」を見届ける、②繭から作品を作る、③繭から糸を繰る経験です。子ども達は金色の美しい糸に感動します。しかし、②と③では蛹の可哀そうな死にも遭遇します。繭から取り出した蛹はまだ生きていました。繭から糸を繰った後、熱い鍋には多数の黒い蛹の死骸が残りました。子ども達は「命をいただいている」という現実を知ります。

これらの経験の前に、先生は蚕を育ててどうするか、子どもなりに意見を表明できる機会を作られました。蛹を生かすか蛹は死ぬけれど作品を作るか、繭から糸をとるか、意見は1つにはなりません。しかし、先生はどれかに決めてしまうのではなく、3つの意見を尊重しました。話し合いを通して、協働的に課題の解決を探っていく民主主義的なプロセスを子ども達は経験します。それはこれからの時代に期待される、能力・資質につながっていきます。その土台あるいは芽生えとなる経験です。この点で適用性や有用性の高い取り組みです。

ただ、大事に世話をしてきた蛹の死に出会うことは、子どもによって衝撃的経験であることも想像できます。子ども達がどう受け止め、消化していくかは個人差がありますし、さすがに理性で解決できることでもありません。重要なテーマですが、この年齢の児童にふさわしいかどうか、簡単に結論の出せない課題をつきつけている意味でも、意義深い実践研究でした。

奨励賞

『0歳児の咀嚼行動を促す保育者の取り組み』

向上社保育園、岸 千奈都先生

岸先生は0歳児を初めて担当されました。子ども達の食事の様子をご覧になって2名の子どもについて特に咀嚼行動を促すことが大事だと考えられました。課題意識が明確でした。継続的な支援の中でも、効果があった支援について報告しておられます。

論理的で読みやすい論文でした。咀嚼の発達段階についても良く勉強されています。しかも、対象が同じ月齢生後8か月の児童2人、それも偶然か対称的な男女です。一人は食事が好き、一人は食事に意欲がありません。2人については入園の4月から継続してそれぞれに適した支援を調理師と相談しながら続けてこられました。他園でも参考になる適用性や有効性の高い実践で、審査員全員の評価も高い実践研究でした。

ただ、2つ疑問が出ました。1つは2人の児童のケースなので、事例としては貴重ですが、これを一般化できるのか、もう少し大勢の児童のデータが必要ではないかという疑問です。今後事例の蓄積が期待されます。2つ目は発達には個人差があります。もし、対象児が著しい発達の遅れを示していて、障害も懸念されるのであれば、医療機関との連携が

必要ではなかつたらうかという疑問です。また、それほどではないとすれば、0歳児なので発達を見守ることも大切だったかもしれません。0歳児の発達への向き合い方をどのように考えておられるか、判断しにくい点がありました。

さらに、本研究の対象になった児童は2024年4月の入園当初既に0歳8か月で、取り組みは2025年5月まで続いており、1歳9か月頃までの取り組みです。0歳児クラスにいるものの1歳児です。咀嚼の発達段階を考えると0歳児の咀嚼行動と丸めてしまつてよいものか、疑問が残りました。

このような疑問は残るものの、どの園にとつても参考になる重要な取り組みでした。

以上、審査結果についてご報告いたしました。今年度の受賞者に共通していたのは、全員、研究目的が明快で、論文の構成力や表現力において優れていたということです。情熱が注がれた実践でも、その意義や子どもの育ちなどが読みやすく効果的に表現されていないとなかなかその良さやすばらしさが読む人に伝わらないものです。京都市保育園連盟はアドバンスゼミを提供しています。日頃のお仕事に加えて文献を読んだり、授業を受講したりするのは大変なことと想像いたしますが、書く力は保育文化賞だけでなく、実践のいたるところ、そして生活でも生きてきます。是非、受講をご検討ください。

京都市保育園連盟がこのような賞をもうけて、先生方の実践研究を広く公表する機会を作り、それを通して京都市全体の保育の質向上を目指していることはとても貴重で、いつかより広く評価してもらえる日が来てほしいと願っています。

そして、保育士さんたちの実践研究を支えるキーパーソンは何と言っても園長先生です。園長先生方のご理解なくして、実践研究の実施も投稿もできるものではありません。結果としての受賞の有り無しに関わらず、園長先生方が園内に実践研究をやろうと思える気風を醸成され、お力添えいただいていることに、心から感謝申し上げます。

最後に、受賞された先生方はもちろん、貴重な実践研究を投稿して下さつたすべての先生方の情熱と今日までの御努力に審査員一同、敬意を表し大きな拍手を贈ります。

2026年1月

審査員一同